

# 鹿藏山遺跡

1984年3月

島根県大社町教育委員会

# 鹿藏山遺跡

1984年3月

島根県大社町教育委員会

## はじめに

本町においては、1978年の文化庁発行「全国遺跡地図島根県」によると、40を越える埋蔵文化財包蔵地が存在します。

しかし、他の地方と同様、近年開発の波が押しよせ、いたるところで大小の造成工事や道路の新設が行われるようになり、遺跡の保存・活用を図っていくために、そうした遺跡の総合的な性格、範囲等の把握の必要性が強く呼ばれているところであります。

このような状況の中で、大社中学校統合校舎を建設するにあたり、国及び県の補助を得て鹿藏山遺跡の発掘調査を行うことができ、ここに報告書を発行する運びとなりました。

しかし、何分にも不十分な体制で実施した調査ですので、報告書に不備な点があろうかと思いますが御寛容戴き、今後の文化財保護と、地域の歴史を知る資料として御活用戴きますようお願いいたします。

なお、調査実施にあたり御指導を戴きました島根県教育委員会並びに終始調査に協力下さった地元関係各位に対して衷心より御礼申し上げます。

昭和59年3月

大社町教育委員会

教育長 梶 谷 嶽

## 例　　言

1. 本書は、大社町教育委員会が国庫および県費補助を受けて、昭和58年度に実施した鹿山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は昭和58年7月19日から昭和58年8月16日まで延29日実施した。
3. 調査組織  

事務局	津戸千弘（教育課長）　和田英作（同補佐）　三原堅士（同補佐）
	吉田明弘（社教主事）　加村健悟（社教主事）　吉川 浩（主任）
	梶谷宣生（派遣社教主事）　窪田哲雄（社教指導員）
調査員	片寄義春（出雲市立今市小学校教諭）
	黒谷達典（出雲市立第二中学校教諭）
調査指導	小畠 浩（島根大学法文学部教授）
	大西郁夫（島根大学理学部助教授）
	藤間 亨（島根県教育委員会文化課主査）
	勝部 昭（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長）
	西尾克己（島根県教育委員会文化課 同 主事）
4. 調査にあたっては、大社町文化財保護審議会委員大谷従二氏の助言を頂いた。
5. 本書の作成は、主として調査員があたり、加村、西尾が援助した。また、図版作成には片寄、黒谷、西尾が携り、井上洋子が協力した。
6. 出土品は大社町教育委員会が保管している。なお、貝類の鑑定については、島根大学理学部大西郁夫助教授に依頼した。

## 目　　次

### はじめに

I 調査に至るまでの経過	1
II 地理的・歴史的環境	2
III 遺構・遺物	4
IV まとめ	10
(附) 調査に関連して	11

## I 調査に至るまでの経過

大社中学校統合校舎を建設するにあたり、その予定地として旧大社高校跡地（鏡川郡大社町大字杵築南1330番地）を島根県から譲り受け、移転改築することになった。

この場所は、鹿藏山貝塚遺跡の周辺であり当該遺跡のほぼ南限ではないかと推定されていた。過去においても部分的な調査が行われたが、マシジミ・ヤマトシジミなどの貝殻や須恵器・土師器などの土器片が採取され、弥生時代中期から後期にかけての遺跡ではないかとみなされていた。

そこで、校舎建設に先だって貝塚の分布状態を確認するため、昭和57年3月10日から同月31日までの間、出雲大社勤務の熊野高裕氏に調査を依頼し、また県教育委員会文化課の指導を仰いだ。しかし、当該地は旧大社高校々舎のコンクリート基礎が縦横に走り地中がかなり搅乱されており、まとまった貝層は発見できなかった。ただ、一部のグリッドから土師器・須恵器片が発見された。

以上のような調査結果を踏まえて、昭和57年6月19日に町文化財保護審議会を開催し検討協議の結果、再調査を実施することになった。そこで、同年7月6日県教育委員会文化課より調査員2名の派遣を得て、また本町文化財保護審議会委員の大谷從二氏の参加も戴き、重点的に4か所を深さ250~270cmまで掘り下げて調査を実施した。その結果、貝層は全く発見することができなかったが、調査地の西側1か所から弥生後期前半と思われる土器片10数点が出土した。同年7月21日、再度文化財保護審議会を開催して諸ったところ、当該地区の隣接地には貝塚や弥生時代の遺跡の存在が推定されるので引き続き積極的にこれら遺跡の範囲確認調査が必要である旨の意見が出された。

早速、同年7月27日に町教育委員会が開催され、遺跡の保護と事業の調整を図るために、大社中学校総合体育館建設予定地を発掘調査することが決定された。

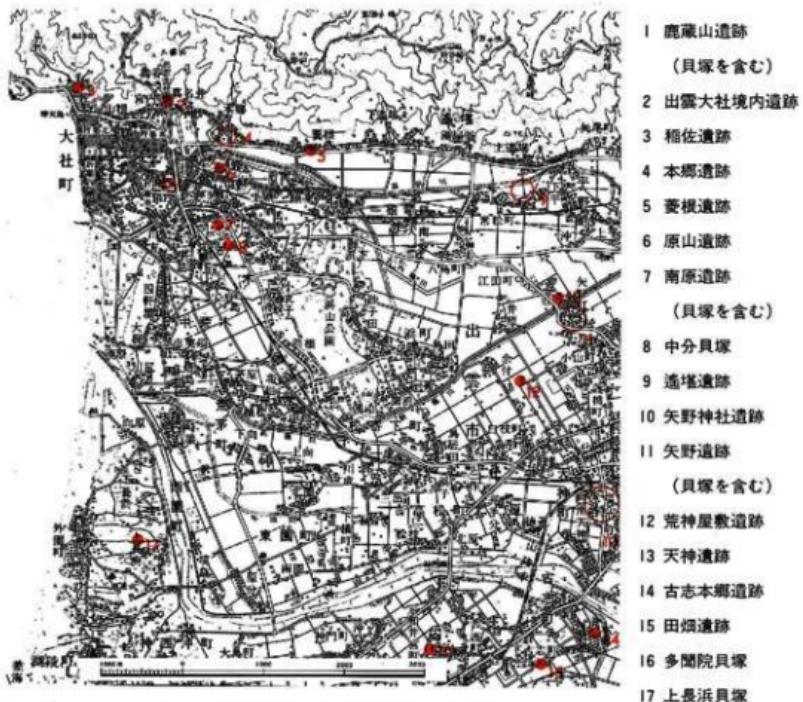
調査対象面積は100m<sup>2</sup>とし、埋蔵文化財緊急調査費を計上して昭和58年7月19日から同年8月16日まで現地調査を実施した。

(津戸)

## II 地理的・歴史的環境

鹿藏山遺跡は、島根県簸川郡大社町大字杵築南の鹿藏山に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。

大社町は、出雲平野の西北部にあたり、日本海を臨む位置にある。大字杵築は、その中心部であり、現在、東西10km、南北10km、標高7~10mの砂丘から成る地区である。本遺跡は、その東南端・大社町立大社中学校（旧島根県立高等学校）の敷地内にある。学校の付近一帯には民家が散在し、西方1.0kmには日本海が広がり、北方1.0kmには北山山塊が連なって、その南麓には天保元年の「口遊」で「雲太・和二・京三」といわれた出雲大社がある。また、東方から南にかけて出雲平野が開け、南方には神門川が西流し、遠く中国山



第1図 鹿藏山遺跡の位置と周辺部の主要遺跡

地を見晴すことができる。この南側一帯は、神戸川の河口として、『出雲國風土記』に載る神門水海と呼ばれる周囲35里74歩（18.84km）の入海があったところであり、出雲平野西部の古代遺跡は、この水海を取り囲むように分布している。

大社町の遺跡は、昭和53年発行の「全国遺跡地図（32島根県版）」によると、およそ40程確認されており、著名なものは、ほとんど出雲大社周辺に集中していることがわかる。

縄文時代の遺跡は、植物纖維を胎土中に含む土器が出土して注目された早・前期の菱根遺跡や、後・晩期に属する原山遺跡・出雲大社境内遺跡等が知られ、北山南麓一帯が数千年前から生活の舞台となっていたことが窺える。

弥生時代の遺跡としては、前記の原山・出雲大社境内の2遺跡の外に南原遺跡や稻佐遺跡が知られている。砂丘周辺や小規模な扇状地に居住地を求め、その周辺の湿地で稲作を営んでいたと思われる。また、同時代の祭祀遺跡として出雲大社の東方200mの命主神社境内から銅戈と硬玉製勾玉が出土しており、文化の様相や伝播を知る上で貴重な資料といえる。

古墳時代に入ると、鹿嶋山遺跡や修理免本郷遺跡など、やや規模の大きな遺跡が出現し集落が拡大されたことがわかる。しかし、古墳は小規模なものが数基確認されているだけであり、その古墳の内部主体はほとんど箱式石棺である。当時、この地域は、神門水海と北山山塊に阻れ、耕地が乏しく、生産力が云平野の他地域に比較すると著しく低かったと推定される。

奈良時代になって、中分貝塚などから居住地が広がったことはわかるが、生産力が低いということには変りがなかったと考えられる。『出雲國大税賦給歴名帳』に記載されたこの地域の人々が、「臣」・「首」等の姓をもたず、部姓であることは、大規模な終期末古墳が知られていないことと共に、この地域の事情をよく物語っているのではないだろうか。

なお、この地域は、律令時代には出雲郡杵築郷に属していたものと思われる。

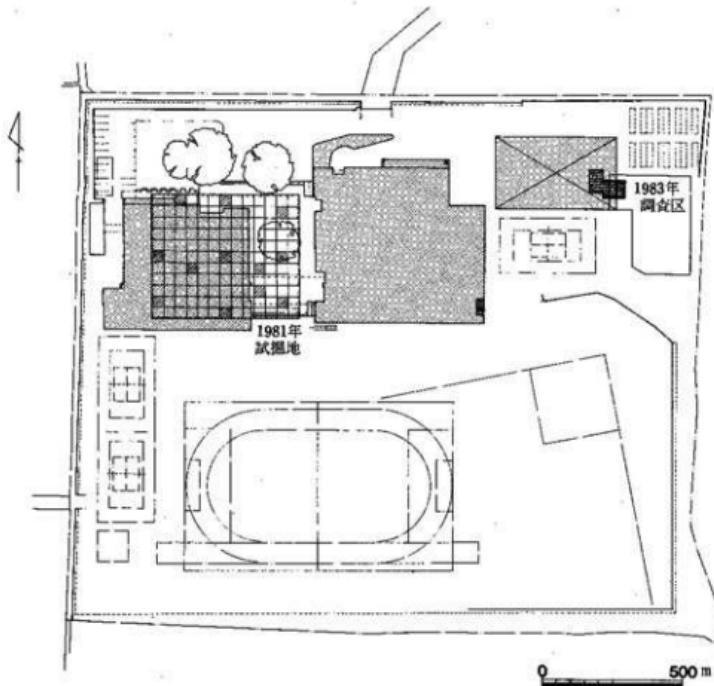
(黒谷)

- 注1. 平安貴族の源為憲が、970年(天暦元)に撰作・完成した初步教科書である。
- 注2. 733年(天平5)に編纂された出雲国の地誌である。
- 注3. 739年(天平11)出雲国で大税の賦給を受けた人々の名を列挙した、帳簿の断簡で『正倉院文書』に収められている。現存部分は出雲・神門2郡に属する約300人が記載され、80歳以上の高年や不能自存者に米を給付したことがみられるなど、奈良時代の村落状態を知る好資料である。

### III 遺構・遺物

(1)遺構 貝層出土地点は第一次調査区の東側の旧体育館とプールの北西端との間でプール寄りの所である。基準杭を新体育館の南側の線とプールの交点から北へ6m、西へ3mの地点に設定し、それをA1とした。西へA2、A3とA7.5まで2mおきにとり、北へBCDと2mおきにとり、それぞれ、各グリッドの北西隅の点をグリッド名にした。調査区は5ラインを北に長い長方形（東西5m×南北8m）となった。

A1の地点での砂の堆積状況は現地表面下約1.3mから班点状褐色砂層（15~10cm）、黒褐色砂層（10cm弱）、茶褐色砂層（25cm）と堆積し、その下に黄色砂層が続いて深く堆積していると考えられる。このうち生活層は黒褐色砂層と茶褐色砂層面であることは遺物の出



第2図 鹿藏山遺跡調査区位置図

土状況からわかる。調査区内での当時の砂丘は東が高く西が低い、南が高く北が低いという南東から北西へ傾斜していたことがわかる。

主な遺構としては、C 2 区～B 2 区に広がる貝層が検出されたことである。地表下約2 m に厚さ17cm（最大厚）、東西幅2 m、南北幅3.4mに分布しており、多量の貝殻が堆積していた。貝の種類としてはヤマトシジミが中心であり、一部ハマグリも出土した。遺構としては、貝層の検出だけで、建物等の遺構は調査区の中では何ら発見できなかった。

#### 各グリッドの調査概要

**5 ラインの東側** C 2 区 B 2 区で前述の貝層が検出され、茶褐色砂層の上面に分布し、その上に黒褐色砂層が堆積していた。貝層の広がりのほぼ中央部から完形に近い須恵器壺が1個、東に口を向けた横倒しの状態で検出された。その中には、貝殻や砂が固く堆積しており、須恵器片、土師器片、鹿の骨1片が入っていた。

C 3 区 B 3 区では茶褐色砂層よりハマグリが1片、鹿の骨1片、石片1片が出土した。また、上層より長径30cm、短径27cm、深さ13cmのピットが検出され、表土層と同じ砂が入っていた。

C 4 区 B 4 区では、須恵器蓋坏片、土製支脚1個、須恵器片、土師器片が出土した。特にB 4 区では、須恵器片、土師器片が集中的に出土した。

C 5 区 B 5 区では須恵器片が1片出土した。

上述のようにB 3 区でピットが、B 4 区で土器片が集中的に出土したのでA ラインの南側も調査の必要を感じ、A 2 区～A 5 区を広げて調査した。

A 2 区からは貝殻が少数出土し、A 3 区からは鹿の骨、小石片、土器片が出土した。

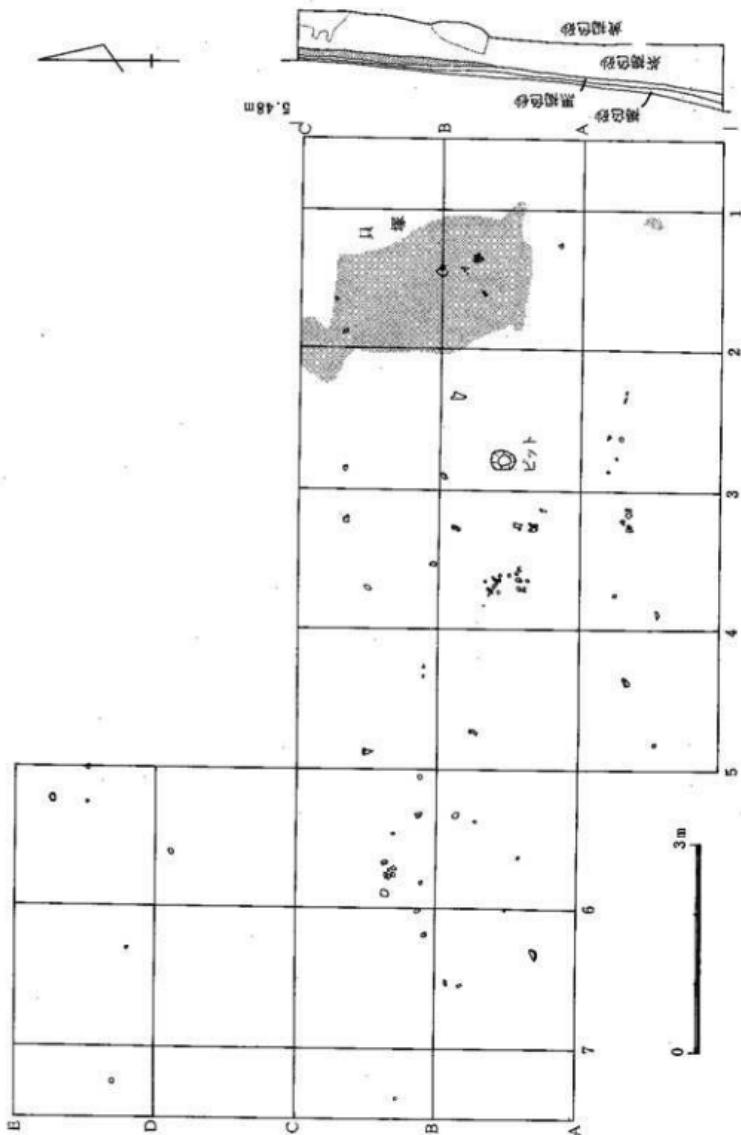
A 4 区からは土師器片、須恵器片が、A 5 区からは須恵器片、鹿の骨が、また、南西隅から貝殻が少数出土した。

**5 ラインの西側** E 6 区 D 6 区では茶褐色砂層の下に黒褐色砂層が堆積しており、その上面から丸いたたき石が1個、地表下3.1mから出土した。それより30cm上から黒色土師器片、須恵器坏片、土師器片等が出土した。

E 7.5 区、E 7 区、D 7.5 区、D 7 区からは黒色土師器片が多数出土し、またD 7.5 区の西側壁面では、茶褐色砂層とその下の黒褐色砂層にはさまれるようにして木炭カスが見つかった。

C 6 区 B 6 区からは、須恵器片がまとめて出土した。

C 7.5 区、C 7 区、B 7.5 区、B 7 区からは須恵器底部破片が出土し、C 6 区の須恵器と接合できた。他に、須恵器蓋坏片、須恵器片、土師器片がいくらか出土した。（片寄）



第3図 庭戸山遺跡遺構実測図

(2)遺物 土器と石器および貝類と獸骨が出土している。量は土器がコンテナー1箱、貝類が2箱、他のものは若干であった。

**土器** 土器としては土師器と須恵器が大部分を占める。また、少量ながら土師質土器の片の破片も混っている。

土師器には壺・高壺・甕・瓶・甕および手捏土器があり、大部分は小片となっている。壺・高壺・手捏土器は図示したもののみ出土している。壺と高壺は古墳時代中頃にあるタイプである。手捏土器は祭祀遺跡からよく出土するものであるが、本出土のものが祭祀に係るかどうかは定かでない。他の土器の時期は後述する須恵器と同じと推定される。

須恵器には壺・蓋・壺・甕がある。土師器と同様に大部分は破片となっている。壺(6)は小形化した段階のもので、この平野の横穴墓から出土する通例のものである。蓋(7)と蓋(8)はかえりをもつもので、壺(9)と共に伴するものと考えられる。壺(10)と壺(11)は共に糸切底をもつ。前者は高台をもたず、口縁がくびれ、後者は低い高台を有し、体部が直線に上る。壺(12)は貝塚中より出土し、内部から多くの貝殻が存在したものであり、貝塚の形成時期を知ることができる。これは頸部が短く、肩部がよく張るタイプである。須恵器の時期は、古墳時代後半から奈良時代にかけてと推定される。

**石器** 石はかなり出土しているが、石器と考えられるものは敲石1個のみである。長径は10.6cm、短径は8.6cmの長方形で、厚さは5.5cmを測る円錐で、一面の中央部を打ち欠いて凹みを作っている。

**獸骨** 保存状態の良いニホンジカの骨が少量出土している。貝塚の位置からみると北山に生息していた鹿であろう。

**貝類** 貝類の9割以上がヤマトシジミである。その他の貝類としては以下のものがある。

ハマグリ

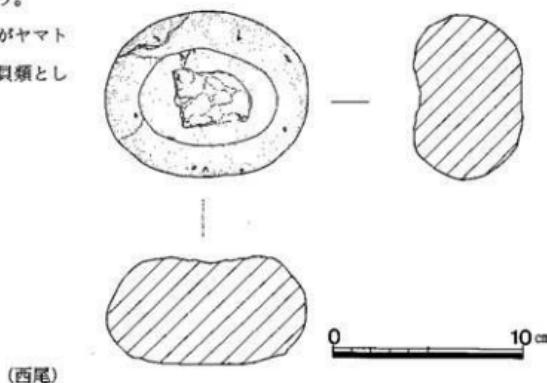
サザエ

タマキビガイ

バイ

イワガキ

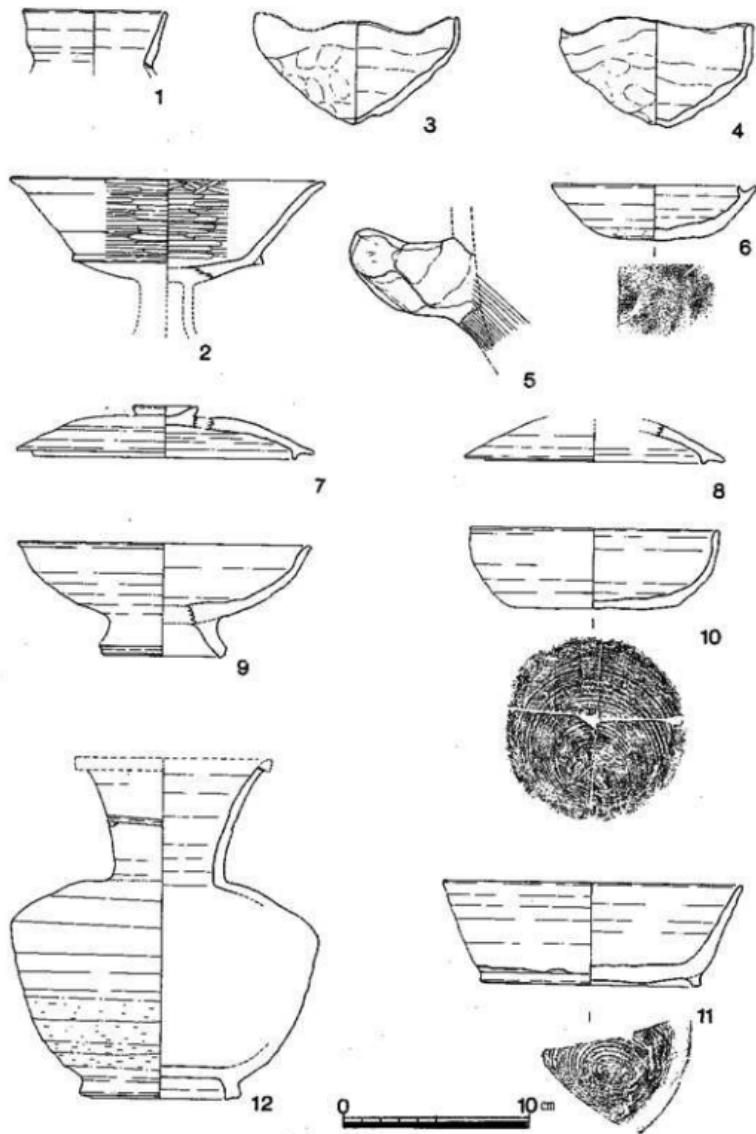
コタマガイ



第4図 座藏山遺跡出土石器実測図

第1表 鹿藏山遺跡出土土器観察表

大別 種類	導入 番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
土 器	1	壺	口径 7.7	口縁部下方にかすかに稜がつく。	口縁部内外面ともヨコナデ。	密	良	黄褐色	E7.5-E6 D7.5-D6 出土
	2	高 壺	口径16.8	平らな底部に外反する側縁が付く。界線が明顯である。	外・内面ともヨコ方向のヘラナデ。	細砂 少量 含む。	良	青褐色	E5 出土 壺部のみ現存。
土 器	3	手捏土器	口径11.0 器高 5.0 ~6.0	口縁内は波状になり底部はとがる。	手捏・指頭圧による成形。	密	良	黄褐色	A4 出土 完形品である。
	4	手捏土器	口径 8.0 ~10.4 器高 5.0 ~5.8	口縁部は波状になり底部はとがる。	手捏・指頭圧による成形。	細砂 少量 含む。	良	黄褐色	E6 出土 完形、内面黒色尾す。
須 器	5	瓶	長さ 6.0 最大径 4.0	コブ状の把手。	表面に指頭圧跡残る。体部の接合面付近には刷手目あり。	密	良	ハダ色	B4 出土 把手のみ現存。
	6	壺	口径11.0 器高 2.8	立ち上りは内傾し短かい。	外面底部はヘラおこし。底部ヘラ削り。	密	良	青灰色	B7 出土 底面外面にノ字の状のヘラ記号ある。
須 器	7	蓋	口径16.0 器高 2.8	天井部はやや丸味を含み中央に輪状のつまみが付く。口縁部には短い垂直のかえりをもつ。	つまみはハリツケ。天井部はヘラ削り。内面底部は仕上げナデ。他は回転ナデ。	密	良	青灰色	C4 出土
	8	蓋	口径13.9	やや丸味をもつ体部に、短い垂直のかえりをもつ。	内外面回転ナデ。	密	良	青灰色	D6 出土 つまみを欠く。
須 器	9	壺	口径15.6 器高 6.1	底部に外傾した高い高台をつける。体部は大きく広がって立ち上がる。	内外とも回転ナデ。	密	良	淡青灰色	B4 出土
	10	壺	口径11.7	平底、体部は内溝しながら立ち上がりそのまま口唇部に至る。	回転余切で切り離す。体部回転ナデ。底部内面仕上げナデ。	密	良	青灰色	B7 出土 完形品。
器	11	壺	口径16.0 器高 5.5	平坦な底部を持ち、低い高台を付ける。体部はほぼ直線的に立ち上がる。	回転余切で切り離す。体部回転ナデ。底部内面仕上げナデ。	密	良	青灰色	C6 出土
	12	壺	器高18.2 胴部最大 径15.5	頸部が短かく、口縁部は大きく外傾する。底部には低い高台がつく。	外側胴部から底部にかけて磨りを施し、他は回転ナデで仕上げる。	細砂 少量 含む。	良	青灰色	B2 出土 完形品。



第5図 鹿巣山遺跡出土土器実測図

## ま　と　め

本遺跡は弥生時代後期から中世に至る複合遺跡である。遺構としては、調査区から貝塚が検出されただけで、その貝層も薄く小規模なものである。出土遺物には、貝塚からヤマトシジミを主体とする17種の貝類と、鹿の骨、土師器、須恵器等がある。前述した如く遺跡の規模は小さいものながら、出土品等より古墳時代末から奈良時代に至る庶民生活の一端を知ることができた。一方、この貝塚を営んだ人々の住居跡は、北に傾斜する貝層より判断して、貝塚の南側すなわち現在のグランド下に存在したと推定できる。

また、本遺跡付近に存在する同時期の貝塚としては、中分貝塚や南原貝塚が知られている。これらは、本遺跡と同様貝層が薄い上、短い期間営まれたものである。これらの貝塚の所在する大社町修理免から荒木一帯は北山、神門水海、日本海にはさまれた砂丘、浜堤、砂原であり、耕地には必ずしも恵まれていないものの、漁撈や狩猟の場としては最も適している。このように稻作が定着した弥生時代以降も貝塚が営まれるのは農業生産力の貧弱さにもよるが、外海、入海を周囲に控えた地理的環境に大きく起因しているものと思われる。

次に本遺跡の貝塚を歴史的に意義づけてみたい。現在、出雲平野には9か所の貝塚が確認されているが、この内、弥生時代に属するものは矢野遺跡、多聞院遺跡<sup>(註1)</sup>に存在する。両貝塚の特徴は、出土する貝の種類が多く、貝層も厚く分布範囲が広いことである。古墳時代の貝塚を伴う遺跡としては、古志本郷遺跡、南原遺跡等が知られており、これらは、貝の種類もさほど多くなく、貝層も30cm前後と薄い。次に奈良時代前後のものとして中分貝塚が位置づけられている。なお、本遺跡も古墳時代末から奈良時代までのものである。これらの貝塚の分布とその出土品より、今後神門水海の復元やその周辺部における半農半漁生活の実態が解明されていくだろうが、本遺跡もその一資料となるであろう。 (片寄)

(注)

1. 西尾克己「中分貝塚」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅶ、島根県教育委員会、1981)
2. 池田満雄「矢野貝塚出土品」(『出雲市の文化財』第1集、出雲市教育委員会、1956)
3. 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(『考古学集刊』第2巻第1号、1963)

(付)

## 調査に関連して

### 1. 鹿藏山遺跡表探の須恵器と備前焼

大社中学校の敷地（西北部）から小路を挟んで西側の一帯で貝殻、土器の散布が知られていた。大社町文化財保護審議会委員の大谷従二氏を中心に昭和18年から20年代にかけて注目し、多くの遺物が採集された。氏によると貢塚の規模は小さく、貝層も薄かったという。また、貝層も地表下近くに存在したのであった。

現在、大社町教育委員会に保管されている土器としては須恵器の蓋、壺、高壺、壺、甕等がある。一部に完形品も存在するが、多くは破片である。蓋（1・2）は輪状のつまみが付き、口縁部にはかえりが付かない。壺（3・4）は低い高台が付き、体部は大きく開いて立ちあがるタイプである。高壺（5・6・7）は脚部のみで、体部を欠く。二方に透しをもつものと、もたないものの二種類がある。壺（8）は長頸壺の底部で、低い高台が付く。壺（9・10・11）は大きく外反する短い口縁と長く大きな口縁をもつものの二種類がある。これらの土器は古墳時代末から奈良時代に属する。

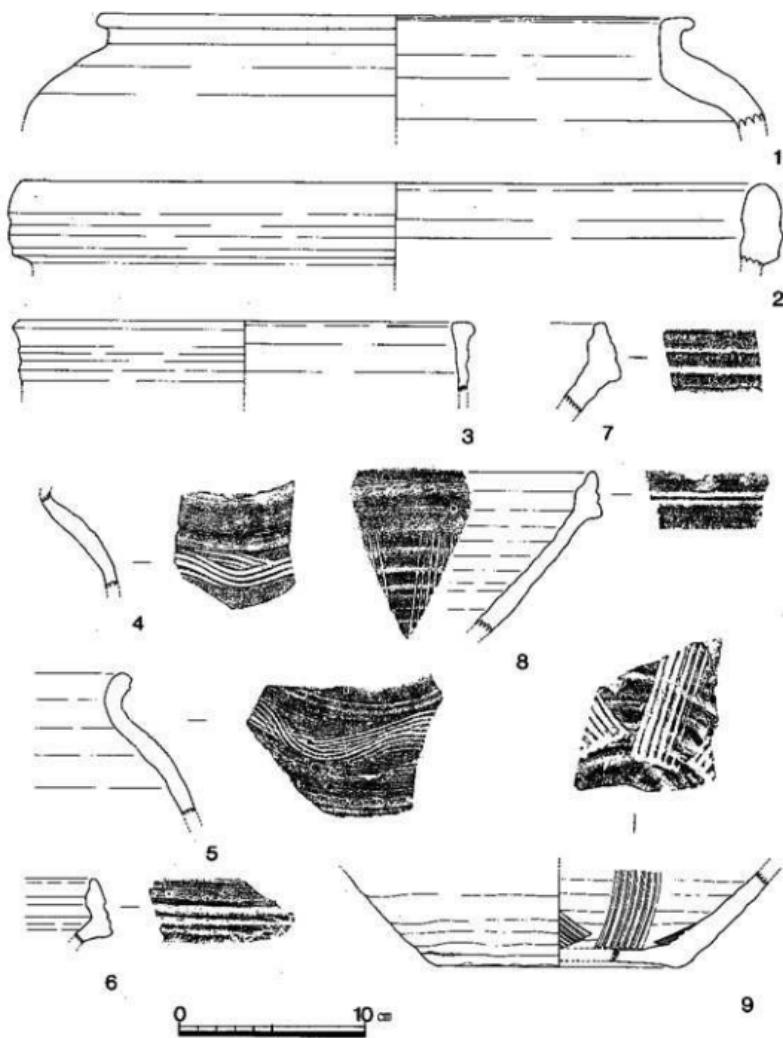
昭和20年に、大社中学校の敷地北側より備前焼がまとめて採集されている。大谷氏によれば、当時ここ一帯は畠地であり、かなりの範囲で遺物が散布していたという。これに関連するものであるかは定かではないが、この砂丘上には砦跡と考えられる鹿藏山城跡が存在したと伝えられている。また、その一角には一字一皿による鹿藏山経塚が位置している。

出土した備前焼の器種には、壺・甕・鉢がある。以下、主要なものについて記述する。

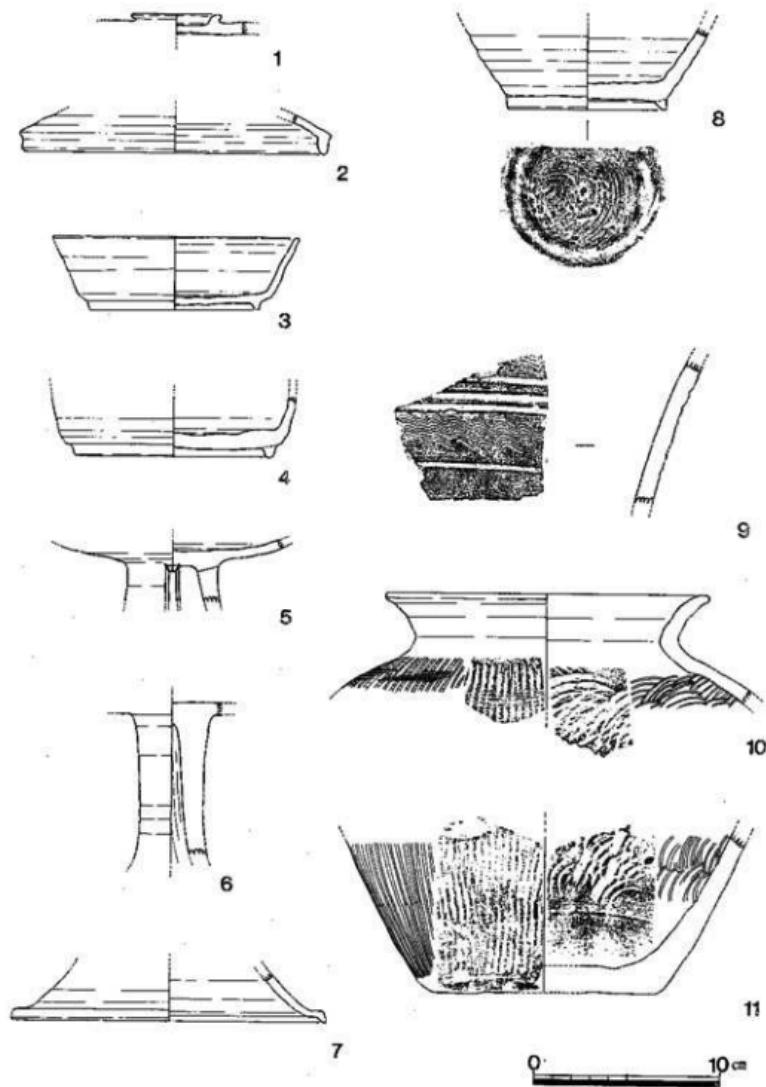
壺（1）は口径32cmを測る大形の壺である。玉縁気味の口縁をもち、ごく短い頸部から大きく張る肩となる。壺（4・5）は小形の壺で、なだらかにカーブする肩部には4、5条の櫛がきの波状文が入る。甕（2）大甕の口縁部で、口径40cmを測る。肥厚する口縁の外面には2条の凹線が入る。鉢（3）は口径24.5cmの円筒状の鉢である。口唇部は平坦につくられ、外面は凹凸となり、胡麻が被る。鉢（6・7・8・9）は壠鉢片である。口縁部の幅は広く、波状に成形されている。全体に水挽き成形で、底部はヘラ状工具で切り離されたらしく凹凸が著しい。内面の櫛目は7本以上が単位で、体部から見込にかけて縦方向に施されている。これら備前焼の時期は戦国時代後半であると考えられる。

第2表 鹿藏山遺跡採集須意器観察表

採入番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	蓋	—	平坦な天井部の中央に輪状のつまみをもつ。	つまみはハリツケ。内面仕上げナデ。外面はヘラ削りか。	密	良	灰色
2	蓋	口径16.0	口縁部は垂直に立ち上がり、体部から天井部はやや丸みをもつ。	回転ナデ	密	良	青灰色
3	坏	口径13.0 器高 3.9	体部は直線上に立ち上がる。平坦な底部にやや外開きの低い高台が付く。	高台はハリツケ。 底部はヘラ切り。 体部回転ナデ。	密	良	青灰色
4	坏	高台径 10.5	体部は垂直に立ち上がる。平坦な底部に低い高台が付く。	高台はハリツケ。 底部はヘラ切り。 体部回転ナデ。	細砂を少量含む。	良	青灰色
5	高坏	—	二方に長方形の透しをもつ。	体部回転ナデ。	密	良	青灰色
6	高坏	—	細長い脚で、透しをもたない。	内面に絞り目が残る。 外面回転ナデ。	密	良	紫灰色
7	高坏	脚径16.7	八の字に聞く脚部で、脚端は低い段をつくる。	内外面とも回転ナデ。	密	良	青灰色
8	壺	高台径 8.5	平坦な底部にやや外開きの低い高台が付く。体部以上を欠く。	高台はハリツケ。 底部糸切り。	密	良	青灰色
9	壺	—	頸部はやや外反する。表面に、3条の凹線をはさんで櫛状工具による波状文が付く。	内外面とも回転ナデ。	細砂を少量含む。	良	青灰色
10	壺	口径17.3	「く」の字に外反する短い口縁をもつ。	口縁脚は回転ナデ。肩部外面は平行のタタキ目が、内面は同心円状のタタキ目が残る。	密	良	青灰色
11	壺	底径12.0	平底。底部から体部にかけては、やや外開きとなる。	外面は平行のタタキ目が、内面は同心円状のタタキ目が残る。底部内面回転ナデ。	細砂を少量含む。	良	暗灰色



第6図 鹿嶺山遺跡採集須恵器実測図



第7図 鹿藏山遺跡採集品備前焼実測図

## 2. 鹿藏山貝塚の貝類

貝類 この貝塚からは、淡水・鹹水・海水産の貝類が出土しているが、そのうち淡水産のヤマトシジミが大半を占めている。出土した貝殻を分類すると下表となる。

第3表 鹿藏山貝塚出土貝類の分類

名 称	出 土 数
クロアワビ ( <i>Haliotis discus diacus</i> )	1
メガイアワビ ( <i>H. sieboldii</i> )	1
オオコシダカガニガラ ( <i>Omphalius pfeifferi carpenteri</i> )	1
サザエ ( <i>Batillus cornutus</i> )	6
ハシナガニシ ( <i>Fusinus longicaudus</i> )	1
ミガキボラ ( <i>Kelletia lischkei</i> )	1
ボウシュウボラ ( <i>Charonia sauliae sauliae</i> )	1
イボニシ ( <i>Reishia clavigera</i> )	1
レイシガイ ( <i>Reishia bronni</i> )	2
バイ ( <i>Babylonia japonica</i> )	4
イワガキ ( <i>Crassostrea nipponica</i> )	3
タマキビガイ ( <i>Glycymeris vestita</i> )	5
ヒメツメタガイ ( <i>Neverita vesicalis</i> )	2
コタマガイ ( <i>Gomphia veniriformis melanaegis</i> )	3
ハマグリ ( <i>Meretrix lusoria</i> )	1
サルボウガイ ( <i>Scaphavca subcrenata</i> )	2
ヤマトシジミ ( <i>Corbicula iaponica</i> )	多 数

(島根大学理学部 大西都夫助教授の鑑定による)

なお、『出雲國風土記』には神門水海に玄螺、北の海（日本海）に鮑魚、螺、胎貝、妹（ハマグリ）、石華（カメノテ）、蠣子が記載されている。

(西尾)

第3表 出雲平野における貝類出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	自然遺物	文献
矢野遺跡 (含貝塚)	出雲市矢野町	弥生時代	(貝類) ヤマトシジミ、イシガイ、オオタニシ、カワニナ、サルボウ、サトウガイ、マガキ、キハマグリ、ヒナガイ、イタヤガイ、アダムスタマガイ、チリメボラ、タンゲニシ、サザエ、クロアワビ、イズモマイマイ (魚骨) フブ (歯骨) シカ、イノシシ	池田満施「矢野貝塚出土品」 『出雲市文化財』第1集出雲市教育委員会、1956) 東森市良・西尾克己「矢野山塚」 『山窮土上施肥地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』、 建設省出雲工事事務所、島根教育委員会、1980)
多聞院遺跡 (含貝塚)	出雲市知井宮町本郷	弥生時代中期 古墳時代前期	(貝類) ヤマトシジミ、ニホンシジミ、カラスガイ、マツカサガイ、カタハガイ、オオタニシ、コグマガイ、アリンガイ、フジナミ、サルボウアカガイ、マガキ、テングニシ、オアワビ、サザエ、ハマグリ、シオフキ、イガガイ、マイマイ、アサリ、アカニシ (歯骨) シカ、イノシシ	池田満施「知井宮多聞院貝塚」 『出雲市文化財』第2集出雲市教育委員会、1960) 大塚初重 「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(考古学雑刊第2巻第1号、1963)
天神遺跡	出雲市天神町	古墳時代中期	(貝類) セタシジミ、サラガイ、カキ (魚骨)	『出雲の古代を考えるI・天神遺跡の諸問題』(出雲考古学研究会、1979)
古志本郷遺跡 (含貝塚)	出雲市古志町本郷	古墳時代後期	(貝類) ヤマトシジミ、ハマグリ	
田中谷貝塚	出雲市内神西町田中谷	-	(貝類) ヤマトシジミ	
鹿戸山遺跡 (含貝塚)	鏡川郡大社町作栄南	古墳時代後期	(貝類) ヤマトシジミ、マシジミ、カキ、ハマグリ、シオフキ (歯骨) シカ	
南原遺跡 (含貝塚)	鏡川郡大社町中窓木	古墳時代	(貝類) ヤマトシジミ、マシジミ、カキ、ハマグリ、シオフキ	
中分貝塚	鏡川郡大社町修理免	奈良時代 平安時代初期	(貝類) マガキ、ヤマトシジミ、チヨーセンハマグリ、コクマガイ (歯骨) シカ	
雲部1遺跡 (含貝塚)	鏡川郡湖陵町東三郎	-	(貝類) ヤマトシジミ	『湖陵町誌』(湖陵町、1970)

(『島根県埋蔵文化財調査報告書』より転載)



# 図 版



鹿藏山遺跡付近の航空写真（大社中学校は右上の方形枠内）



鹿藏山遺跡近景

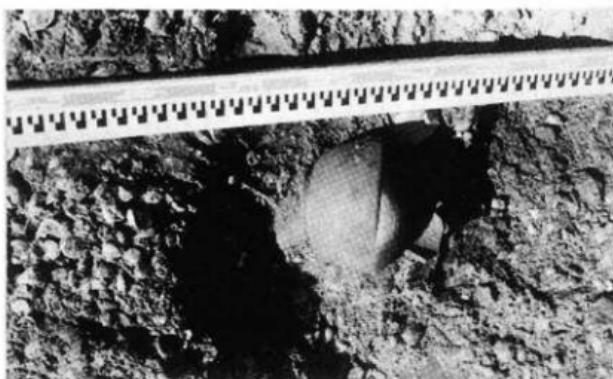


鹿藏山遺跡調査区全景

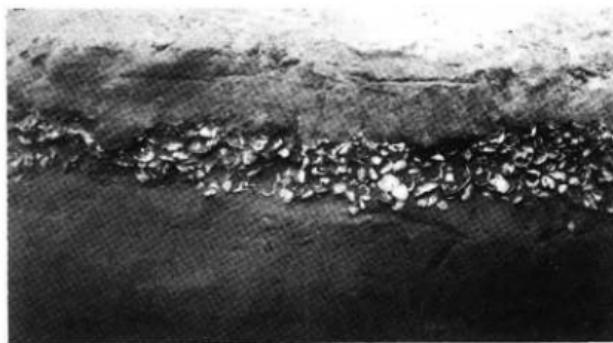
発掘風景

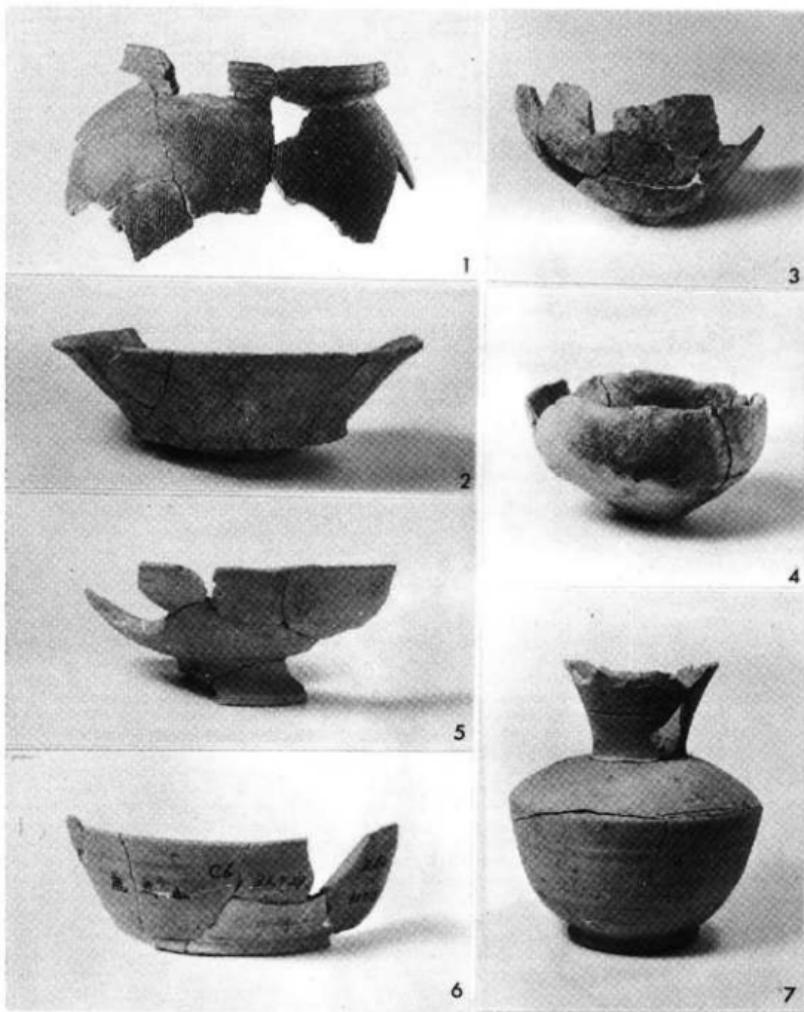


遺物出土状況

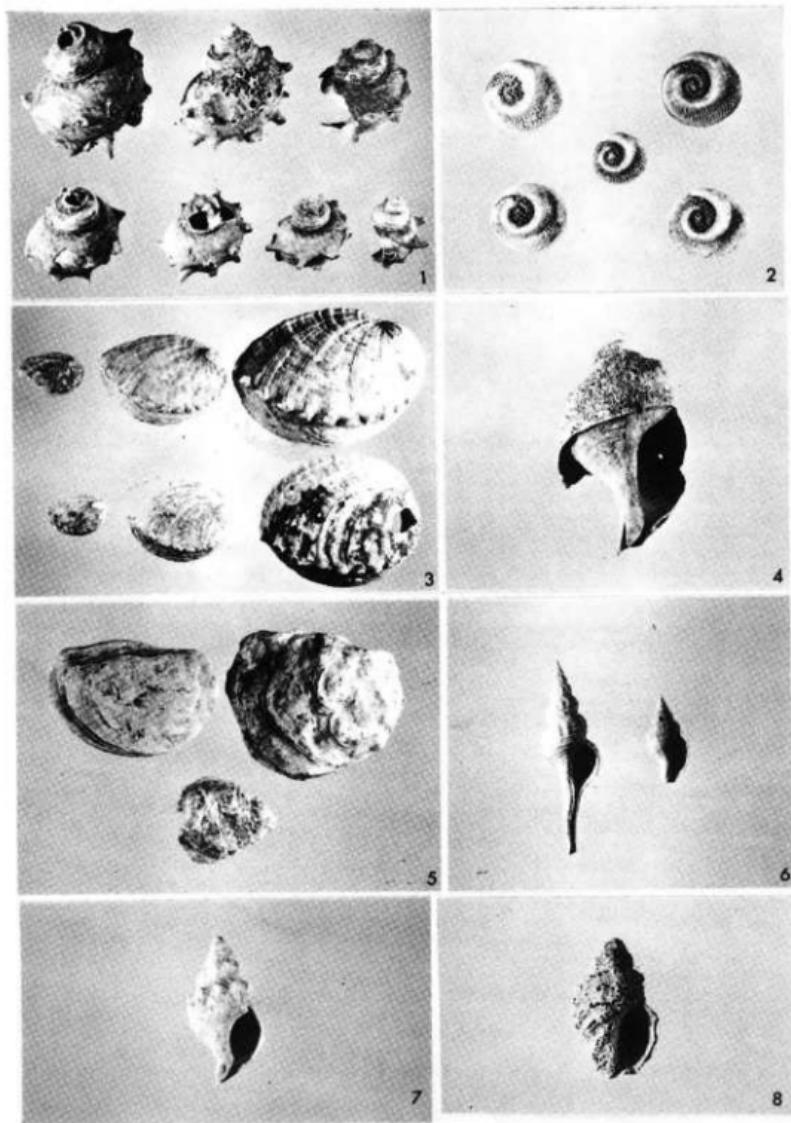


貝層の状況



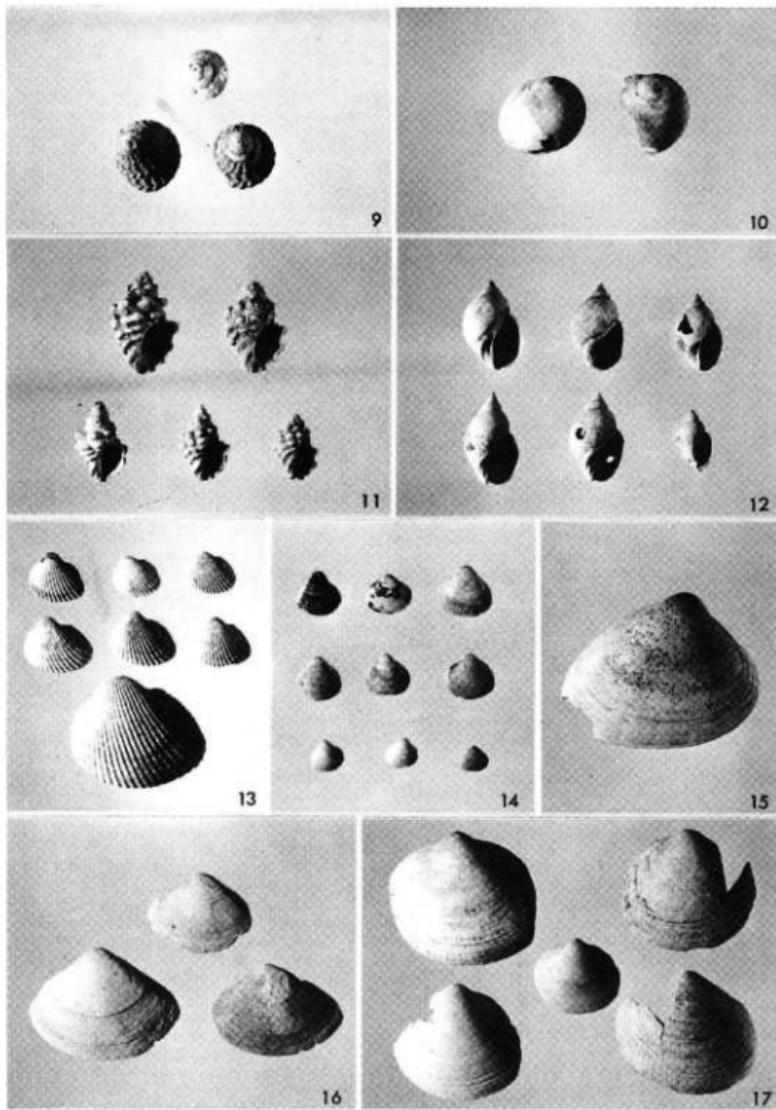


鹿藏山遺跡出土器 (1. 弥生土器—82年出土 2~4土師器 5~7須恵器)



## 鹿藏山遺跡出土貝類 I

( 1. サザエ 2. サザエフタ 3. 上 クロアワビ  
下 メガイアワビ 4. ボウシュウボラ  
5. イワガキ 6. ハシナガニシ 7. ミガキボラ 8. イボニシ )



## 鹿藏山遺跡出土貝類 II

( 9. オオコシダカガニガラ 10. ヒメツメタガイ 11. レイシ 12. バイ 13. サルボウガイ )  
 ( 14. シジミ 15. ハマグリ 16. コタマガイ 17. タマキガイ )

昭和59年3月20日 印刷  
昭和59年3月25日 発行

## 鹿 藏 山 遺 跡

発行 大社町教育委員会  
印刷 玉木屋印刷